

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 岩崎 稔 印

学位申請者 山下恵理

論文名 フィリピンにおけるろう文化概念の受容と言語のヘゲモニー
—感覚の植民地主義から「声」なき身体を取り戻すために

1) 本論文の概要

山下氏の学位請求論文は、フィリピン近現代史の史的検討と、フィールドワークで得られたエスノグラフィーを結びつけながら、フィリピンのろう文化を取り巻く言語ヘゲモニーを分析し、それをとくにポストコロニアル状況の読解に活用している。聴覚障害者(deaf)は、長きにわたって健全性の欠格者にすぎない存在として扱われてきたが、論文は、ろう者を「障害者」としてではなく、手話を母語とするエスニック・マイノリティ集団、マイノリティ・カルチャーとして位置づけ直し、マジョリティ文化との並行性や相克を検討することで、フィリピン社会そのものに伏在する歴史的な諸課題を照らし出した。

山下氏の論文は、方法論的解明を行う「序論」とともに、「第一章」でまず「ろう文化」の概念とそれが含意する「感覚のヒエラルキー批判」を提示し、「第二章」では一転してフィリピン人ろう者を取り巻く現状を検討している。「第三章」では、アメリカの植民地支配に原因があるポストコロニアル状況を「身体と感覚の植民地支配」として検討したが、それは本論文のもっとも独創的な部分であった。「第四章」ではマルコス政権による独裁期に、むしろろう者の社会組織が保護され促進されていたという逆説を、「独裁と福祉」という観点で考察し、さらには「第五章」において将来にわたる考察として、フィールドワークの成果を組み入れつつ、「ろう者の周縁化とろうによる社会改革」を論じていた。

2) 本論文の評価と問題点

審査委員によって、本論文が、先行研究を踏まえてユニークな研究テーマを設定しており、諸資料の組み合わせによる手堅い実証分析を行っているという点で、一様に高く評価された。これまでろう文化研究にポストコロニアル理論が導入されることはあったものの、西洋の言語観や感覚論とも結びついているろう文化理論が他地域に普及する上での影響や、現地のろう文化社会にもたらす変化、

旧宗主国が手話教育にあたえる影響については、十分な議論がなかった。そのなかで本論文は、フィリピンを事例として、歴史記述とフィールドワークによるエスノグラフィーを組み合わせるという方法により、ろう文化をとりまく複雑な言語ヘゲモニーや、当事者によるアイデンティティ希求とその実践を明らかにした。とくにフィリピン歴史研究ではしばしば登場する「継続する友愛的同化」をろう文化という文脈で独自に展開した第三章から第五章までの議論は、本論文にしかない高い価値を擁しているという指摘もあった。

いっぽう問題点として、(1) 「通訳者」と「話者」とがスイッチしながら言語のヘゲモニーを解体する試みがあると論じるくだりで、「ヘゲモニーを解体しようとしている」という主張が導かれる過程がやや拙速な論述にとどまっていること、(2) 「母語」などの語彙が、言語学でのそれを厳密に踏まえないまま使われている箇所があり、そのため自覚しないまま規範主義的な主張に入り込んでしまっている箇所があること、(3) ろう者における「人口内耳」の使用という近年の局面が視野の外に置かれていること、(4) 「身体の発見」についての論述や、人種主義や社会防衛をめぐる先行研究との関連などの論理がなおも粗いままであることなどが指摘された。一部に誤字・脱字が残っていたことも注意を要する点として挙げられた。

3) 最終試験の審査と結論（日程と概要、可否）

公開審査ならびに最終試験は、2021年11月13日土曜日に海外事情研究所会議室で行われた。申請者が博士論文の概要を約40分で発表したのち、審査員との質疑応答が行われた。各審査委員からは、本論文の高く評価できる点とともに、上記の問題点も指摘された。しかし、山下氏はこれらの指摘を十分に理解し、提示された課題を真摯に受け止めることができた。また、今後本論文を書籍として結実させる際に、そうした瑕疵を克服して、与えられた指摘を具体的にどう反映させていくことができるのかという道筋について、実のある議論を行うことができた。加えて、これらのやり取りを通じて、山下氏の研究者としての高い将来性を垣間見ることができたことも指摘したい。

以上の審査結果を踏まえ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいとの結論に達した。